

戦争を知らない
世代へ⑤大阪編

銃後の婦人

戦争を知らない世代へ⑤大阪編

銃後の婦人

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑤

銃後の婦人

昭和50年5月3日 初版第1刷発行

編者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

電話 東京(294)8731(代) 振替口座 東京117823

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

0036—7005—4438

発刊に寄せて

創価学会青年部の反戦出版第五集を、創価学会四十五年目の佳日を記念して、この大阪の地において、刊行できたことは、私達の最大の喜びである。

本書を一読すれば、多くの青年は、自分達の育った戦後がどのように困難な、生きにくい世の中であつたかを理解するだろう。

「エライことでしたナア」というのが、実感である。戦争は最前線の兵士だけが戦うものではなかった。特に、近代国家間の戦争は、総力戦であるから、銃後では、女性、子供も戦争を戦ったのである。そして、恐らく、女性、子供の戦いは戦後にも引きつがれ、今もなお続行中といえるのかもしれない。

本書はそれらの銃後の体験の中から、婦人の悲嘆と、奮闘ぶりとを如実に語ってくれるものを集めている。空襲という状況の中で、夫や息子の戦死を知らされ、涙を流すことすら忘れるほどの悲嘆にもかかわらず、食糧難、焼夷弾による火の恐怖が襲ってくる。そして残された幼な児をかかえて生き抜いていく。その婦人の強さは何物にもかえがたい。私達青年もまた、これらの無数の「母」に育てられてきたに相違ない。したがって、「母」の体験を知ることとはそのまま、私

達の生い立ちを知ることでもあった。

現地で体験収集に活躍された方々、その他刊行に尽力された中央の反戦出版委員会のメンバーに深く感謝する。

一九七五年五月三日

創価学会青年部
関西男子部長

中村康佑

銃後の婦人——目次

I 夫の戦死・息子の戦死

主人の戦死……………	金杉鈴代	10
陰膳に夫の無事を祈る……………	早山初栄	16
忘れられない夫の手のぬくもり……………	守口富子	22
半年間の結婚生活……………	森下好子	26
四人の幼児をかかえて……………	竹本ハル子	29
戦いに夫逝かしめて……………	延与寿子	33
五人の子供と共に……………	亀谷シゲ	38
赤紙に踏みにじられて……………	堀本志寿	41
今も信じられぬ夫の死……………	山本秀子	45
夫は長男の夢に現われて……………	井川ちよ	49
別離の言葉も交わせなかった私……………	山口カズエ	52
終戦を目前に戦病死した夫……………	真野須恵子	56

「子供を頼む」の一言を守って……………	中農艶子	62
戦争の爪痕は絶対に消えない……………	竹内春野	65
戦争に奪われた息子と娘……………	国安リエ	73
遺骨は一枚の紙片……………	五十嵐トミ	77
二人の息子は今もどこかで……………	池田マサノ	80
犬死にした一人息子……………	五味千代	82

Ⅱ大阪空襲の悲惨

焼死の娘を背にした大空襲……………	才田ユウ	86
焼夷弾は夫の頭上へ……………	正木文枝	89
幼児かかえての避難……………	田中登代子	92
臨月の身で阿鼻叫喚をくぐる……………	小山梅子	94
幾度か思った母子心中……………	金沢とら	98
一週間炎上した街……………	平田定子	102
爆弾は雨のごとく……………	細見静江	105
大阪への空襲……………	桜井和貴子	109

直撃された我家……………赤沢富恵

眼前に拡がる地獄絵……………世良まさえ

防空壕での寝起き……………片岡小寿恵

日本軍、それは私の敵……………村上愛子

残ったのは二枚の巻ぶとん……………浮田トミ子

九死に一生を得た私……………四宮クニ代

燃えていた赤児の頭……………芹井シゲ

防空壕で助けられ……………山口さとえ

着のみ着のまま焼け出されて……………西山ヤエ

防空班長として戦う……………栗原すえ

忘れられない焼死体の山……………高部操

避難先に迫る火……………西部信子

Ⅲ 戦中戦後の食糧難

食糧難は女の戦争……………三井トミ

栄養失調で親子四人が他界……………黒木スエ

空腹の訴えに眠れぬ日々……………	長戸キク
山林を開墾しての食糧作り……………	岡田ツユノ
朝な夕なに食を求めて……………	松村富美栄
とうとう主人の本までも……………	金子光子
目につくあらゆる物を食べて……………	浦野ツヤ子
持物すべてを食糧に交換……………	武本トミエ
編集後記……………	松大太郎

夫の戦死・息子の戦死

主人の戦死

金杉鈴代（55歳）

昭和十八年十一月十三日、亡夫の命日です。

主人を戦争で失って三十一年余りになりますが、私はよく主人の夢をみます。

夢の中の主人は二十五歳の若々しい顔をしています。夢とは何とたよりないものか。

小学校六年生の頃に支那事変が始まり、そのあと戦争は拡大される計りで、次々と知人や身内の者が戦場にかり出される中で私は成長しました。

主人とは十九歳で結婚しました。私の主人はよく働く人でやさしく、結婚して三年六カ月目に子供ができました。

子供ができるまで私達は、よく山や海へ行きました。紀南の海は青く空は澄み渡り、山は海にすぐ近くにありますが。

春は山でわらびやいたどりをつみ、夏は海で貝を採る、二人はいつも一緒でした。

山でけわしい処では主人は私をおぶってくれました。思えばけわしい世相の中での束の間のし

あわせでありました。

主人と一緒の五年間は、私の一生の幸福を圧縮したものであったと思います。

日々にはげしくなる戦争のニュースは私に、「主人もいつかは行くのだ」と思わせるようになり、昭和十八年十月二十日召集、二十六日にははやばやと出発しました。遂に私は二度と主人の顔を見ることはなく、一家の柱を失ってしまったのです。

主人が応召した頃には、見送りの人もまばらでした。列車の最後尾のデッキで手を振っていた主人、それがあの人を見た最後で、二度と相見る事のない別れであったといえましょう。

一枚の紙切れが、断わる事のできない厳しい呼び出しです。権力の強い力にさからう事の出来ない弱い立場の私達であってみれば、黙って行くより方法はなかったのです。

主人の入隊先は佐世保でありました。何しろ家を出て十八日目には死んでいて、佐世保から「これから〇〇へ行く、子供の事母の事、よろしくたのむ」と電報のような簡単なハガキが着いたとき何の音沙汰もなくて、私の方からは一度の手紙も出す事が出来ずじまいでした。

それでも否、それだからこそ毎日、便りの着くのを首を長くして待ったのです。

半年後に何の便りもないままに戦死の公報がはいりました。

国の為の働きなどという華々しい事は何もなく、主人は戦地へ向う途中死んでいたのです。

からだの大きな人で海では魚のようだと、人にいわれた主人は、どのような死に方であったか

と、思えば胸が張りさけるようです。

私達には娘が二人いますが、末娘はおなかにいて、主人出発の時はそれとわからず、その子は父の死後に生れました。

主人戦死の公報をきいて四十日あとです。

私は二人の子供をかかえて、その日を生きる事に懸命でありました。どんなに戦争を恨み、憎んだことでありましょう。

ともかく昭和十九年四月十九日、昼すぎに主人戦死の公報をうけました。東支那海で戦死したとの報らせでした。

私はただブルブルとふるえていました。人間本当の悲しみに出会った時には泣きません。涙など出るものではありません。

どれ位時間がたったのか記憶にないのですが、気がついてみると私は主人の着物を出して鼻に当てていました。

悲しい事に主人のうつり香はなく強いナフタリンの香りがするだけでした。

その時になって初めて涙にくれ泣きに泣いたのです。戦争は私から主人を奪いそのうつり香さえも奪ってしまったと、思えば思う程悲しくて、一人号泣したのを覚えています。

だがこの泣いた時はまだよくて、そのあとに私の苦難の道が待ちうけていました。

主人の残してくれた金は終戦後の円の切り替えですぐになくなり、私は生きる為に子供達の為に真っ黒になって働きました。

年老いた母は子守りをして私を助けてくれたのですが、その母も主人の死後に二年余り後に亡くなり、もう誰も私達を助けてくれる人はいなくなりました。

冬の朝、星を見ながら働きに出て、夕方とぶように帰ると子供は熱を出してぐったりしています。長女が病弱でありました。

誰も面倒をみる者がいない為に、子供はよくかぜをひいて熱を出すのです。

苦しそうな子供をみても医者にみせる事ができません。私は洗面器に塩とホーサンを入れ熱湯をそそぎ、タオルをひたして温湿布をします。熱い筈なのに子供は私に向って、ニコツとします。私に氣を使って幼い者がと、込み上げる涙を止める事ができませんでした。そんな事で子供の病氣をなおした母親がいたなどは、現代のお母さん方には、考えられないことだと思えます。

戦中戦後の食糧難は、若い人達も話をきかれてご存じと思いますが、私達親子も食べる物を手に入れる事ができず、ずいぶん苦勞をしました。食糧を得る為に衣類を食糧と交換したのは勿論の事、少しの食べ物子供に与えて空腹をかかえてねむった夜が幾度あったかわかりません。生活の豊かな人でも食べる事に追われた時代です。私達親子が食べる物で苦勞したのは、当然

であつたかもしれません。

苦しみは食べる事だけではありません。私は未亡人というには若すぎました。

二人も子供をかかえている私ですのに、心ない世の男性は私に、主人を裏切る行為をさせようと、色々な手を使います。

この時程亡くなった主人を恋しく思い、世間の風の冷たさを感じた事はありません。

人はすきがあるからというでしょう。そうした苦難を切り抜けながらの毎日は、私を段々と女らしくない女にしていきました。

第一に、人から軽くみられた事に対して、我慢できない程の屈辱を感じたのです。

戦争の為に、これだけの苦しみをたえなければならなかった不合理に、私はいきどおりの思いで一杯です。

戦争で父を亡くしたのは私の子供だけではなく、どの子供さんも父を恋い、母と共につらく淋しい日を送ったことでしょう。

私は成長した娘達に大切にされてくらす昨今、亡き夫がわずか二十五歳の若さで戦争という悪の為に、あらゆる可能性を奪われた事実に対して、この上ないいきどおりを感じています。

現在、生きていれば五十六歳の主人、まだまだ世の中の為に何かをする事が出来たと思うのです。又私が生きている限り戦争の傷跡は消えないのではないでしょう。